



ステップスギャラリーオーナー、吉岡まさみが企画するFEVORITE 展はこの時期に定着してきた。今回参加したアーティストは今年ステップスで個展を開催した相澤秀人、中村陽子、ドラガン・パーボヴィッチ、2015年に個展の菅沼緑、2014年に個展のミラン・トゥーツォヴィッチ、2015年に在日セルビア共和国で開催された「2+2展」に参加したサーシャ・マリアノヴィッチの6人である。相澤(上左)は木にラッカー塗装の新作2点は、彫刻とも平面とも区別がつかず、R・マグリットの作品のようなイリュージョンを発生させる。中村(上中)は2003年のキャンバスにアクリルの作品1点に2007年のFRPの2点を組み合わせた作品群と、入り口に今年の個展の小品2点であり、新旧が入り混じるからこそ絵画に対する中村の探求が強調される。入り口に1点と事務所に8点展示されたドラガン(中右)の写真は、個展の際とはまた異なる見解を示していく。菅沼(中中)のカリンという木を素材とした10点は、単なる形の追求や素材への挑戦という枠に留まらず、美術作品とは何かという問いを引き起こす。ミラン(右上)が紙に木炭で描いた5点の作品(2015年)は、

M・レイやA・ジャコメッティなどの過去の偉大なアーティストに対するオマージュを感じさせながらも、ミラン独自の解釈を注ぎ、各アーティストのまた異なる側面を引き出しつつ自己の血脈としている。サーシャ(右下)の紙に鉛筆で描いた4点の作品(2015年)は、子供が階段や扉と対峙する主題であり、写実と物語、現実と空想という区別を必要としない世界観が形成されている。

このようにそれぞれのアーティストによる作品は力強く、閉塞的な現代の世界状況に対する人間存在の発見の格闘が見事に刻まれている。これら作品群の特徴を最大に引き出しているのが、展覧会のキュレーションである。ここに立ち並ぶ作品を眺めると、絵画、写真、彫刻、インスタレーションという既存の定義が脆くも崩れ去り、そもそも現代美術とはそういった基準を破壊することが前提であることを、改めて思い知るのであった。

同時に、作品とは何かを再考する機運ともなる。現代美術は何時しか「現代美術」という分野になり、歴史すら形成しようという間違った道を辿ろうとしているのではないか。「作品」という定義すら喜捨すべきだろう。

